幻
城
記
第
一
話

福元
希高

序章

東京の中心に千代田城がある。

明治維新後、皇居となったこの城は、元は江戸地名の由来となった鎌倉初期の武人、江戸重継の居館であった。

その後、扇谷上杉氏の家臣太田道灌が城郭に改修、江戸城と称した。やがて主が替わり、後北条の手に渡り、それが滅ぶと、徳川家康が江戸幕府を開く為この城を大改築した。

長い歴史の中、数々の戦火を免れ、四季折々の美しいその姿を今に留め、我が国建造物の象徴として厳然たる存在を示し、後世まで残るものである。

これから始まる物語は、その江戸城改築にも関わった人物と、戦国時代に築城され、天下の名城と称えられながら、戦火の中灰燼に帰した三城の物語である。

第一話 下克の宴 多聞城

応仁の乱の後、戦乱麻の如し。將軍としての權威を失い脆弱になった室町幕府。それを支える斯波、畠山、細川の三管領も統率力がすっかり失せ、その下に隷属する守護職、守護代いずれも実力者の家臣を頼るようになっていった。やがて主家よりも力をつけた臣下の者、豪族たちが領主に成り代わって武力で領土を治める下克上といわれし戦国の世。

大和信貴山城、愛妾の前で領主松永弾正忠久秀は最前からじつと目を閉じ、ゆっくりと点てた茶を楽しんでいた。年恰好は四十を過ぎた働き盛り、目の窪んだ、彫りの深い顔立ち、瘦身で品格のある風貌であった。今やその権勢、畿内にとどまらず、他国の領主を震え上がらすこの松永弾正とは、誠に謎の多い不思議な人物であった。出自は阿波とも近江とも言われ、諸国を放浪し、商人に身をやつして財を成し、管領細川氏の被官、三好長慶に仕えるまでその足跡は全く不明である。

奸雄、三好筑前守長慶にその才を認められ、いつしか頭角を現し、力をつけ、長慶の懐刀として家宰にまで出世した。長慶が大和の国

を切り取った時、守護代に任ぜられ、今や大和一円を支配するだけではなく、畏き所のおわす京の都の所司代となり、豪商が支配する堺の街の代官も兼任し、その権勢旭日の如しであった。

側にはべる愛妾に、弾正は目を閉じたまま、

「一服の茶がこのような心の持ちようを教えてくれるとは……奥が深いのう……」

「どのように教えてくれるのでしょうか」

と愛妾お妖の方が尋ねるのに、

「ふむ幻妙なり、明の天目茶碗、この曜変、油滴が妖しく、星が散る如し、覗けば幽玄なる世界が広がるぞ」

愛妾の言葉に耳も貸さず、渡来天目に魅入られている。

「宗易め、これに勝る手土産を持参するかのう」

とまた呟いた。

「あれ、どなた様かお城に上がられまするか」

お妖の方がまた尋ねた。この女性にょしょうは主家のあった阿波の国より連れてきた、本名お陽という弾正の数名いる側女の一人。なかなか気に勝る為、正室と折り合い悪く、家臣の間でもお妖の方と呼ばれる悪評の側室なのだが、閨房での妖艶な媚態が好色な弾正に結構気に

入られて、ここのところ、ほとんどお妖が身の世話を焼いていた。

「堺より今井宗久と千宗易が間もなくこれに参る、この兩名の供の者に混じって身分低き風体の者二人。されどゆえあつてこの二名の者も城内に上げよ、それと酒宴の仕度を命ずる」

「はい、おん下知、申し伝えまする」

「それと今宵は、一晚中語り合うことになろうが、明け方になつても床に参る、よいな」

「はい、香を焚いてお待ちしております」

と口元に妖しい笑みを浮かべ、立ち上がり頭を下げた。そのまま静々とお妖の方が去り、弾正はまだ茶の余韻を楽しむ風であった。

時が過ぎ、城中広間に二人の客と、少し下がったところにまた二人平伏していた。

弾正が老臣と小姓を伴って現れ着座すると、客の二人は正座したまま頭を垂れて、老臣高山友照の声を待った。

「今井宗久殿、千宗易殿、御前である」

声を受けて、

「お館様、お召しにより、今井宗久とこれに控えし千宗易、罷り越しました」

「おお、一瞥以来であるな、よう参った、両名変わりないようじやな」

弾正が笑みを浮かべて声を掛けた。

「はい、お館様には益々ご健勝のこと、我ら堺衆、誠に嬉しき限りにござりまする」

「会合衆も変わりないか」

「はは、厳しき世なれど、お館様のご加護のもと、街の衆すべて安堵しております」

「堺の街に異変あらば、すぐにでも万の軍勢を差し向ける、そのように皆の衆に申し伝えよ」

「はは、誠にありがたきお言葉、我ら堺衆、改めてお館様に忠誠を誓いまする」

「よう申した。さて、両名の者、今宵は積もる話がある。別席に酒宴の仕度もある。ゆるりとするがよい」

このあと、宗久に、

「そうそう、其の方の屋敷に美濃の国より、武士が一人私宿しておるそうなの」

「これは、お耳の早いことで。確かに斉藤様のご家中でお一人滞在

されております」

「名は何と申す」

「明智十兵衛と名乗っております」

「やはり鉄砲か」

「はい、仰せの通り、どこの領主様もこの新しき武器に注目してござります」

「その後、威力は増したかの」

「はい、いささか。日夜、橘屋又三郎が陣頭指揮を執り、改良を重ねてございますれば」

「戦の様が変わるであろうな」

「我ら堺の商人は中立でございますが、お館様だけは格別でございまする」

「言うてくれるわ。して斉藤道三殿の動きは如何に」

「あ、いやいや、それはまだ」

「今だから話すが、蝮の道三公とは旧知の間柄よ」

「ほ、それは初耳でございます。驚きました、お若い頃でございますか」

「ははは、蝮殿もこのわしも、氏素性の判らぬ出自と陰口を叩かれ

ておる、若き頃の戯れた生きざま、これ以上話すことはない、道三殿も同じであろうよ」

「これは、とんだご無礼を」

「その、斉藤家の者、鉄砲の筋はどうじゃ」

「はい、日ごと射撃場にて励んでおります」

「ふうむ、細作を増やさねばなるまいか」

「滅相ありません。手前共はお館様に何ら隠し事などございません、お尋ね下されば何なりとお答え致します」

「分かっておる。細作は、堺でのうて美濃方面のことよ」

弾正はこれで言葉を切り、じつと今までのやりとりを聞いていた千宗易に目をやり、

「宗易よ、茶の道、精進しておるか」

「はい、日夜、愚考しておりますが、なかなか」

「それよ、茶の世界は誠に奥深い。我ら荒くれ武士には、戦場で死地に赴く時の一服の茶にて、心気も静まり覚悟もできる。しかして平時の際の茶の心構え、究むるにはより以上に難しい」

弾正は、ふうつと息を吐いて、

「我が茶道の師は武野紹鷗。宗久、宗易、其の方らも同門である。

師を共にするわしらの結束は益々強固にせずばなるまい」

宗易が笑みを湛えて、

「恐れ入りました。お館様、此度はこの宗易、いつまでもこのお城が平時でありますことを祈念し、比類なき名品を持参しております」

「おお、誠か、いつもながらありがたい」

宗易が前に置いてある袱紗をゆつくり解き、すつと差し出した。

「これは」

弾正が置かれたものに目を凝らす。

「公方様義満公が御愛用の名物、九十九髪^{くじゅうく}茄子の茶入れにござりまする」

「しゃあ、これは」

弾正は口を開いたまま声も出ず、やがて落ち着いて、

「や、どうしてこれを手に入れた。足利義政公の代に我ら茶道の祖、

村田珠光に御下賜され、その後転々と渡り、行方杳として知れずと

聞いておったが」

「畏れながら、私が手に入れたと申すより、堺会合衆の全智を傾けての入手にござります。詳しくことはここに御同座の宗久殿も話せません」

「誠に」

と宗久も重ねて答えた。

弾正は老臣友照にそれを受け取らせ、前に差し出させた。小振りの茶入れを愛おしそうに、そうっと手に取り、目をしばたいて眺めまわし、

「よう手に入れた。仔細は聞くまいぞ。国一つでも買えぬといわれる名品である。高くついたであろうが、よいよい、其の方らに応分の褒賞は取らせるぞ。また望みあらば聞いてとらす。このこと、生涯忘れぬぞや」

宗久が静かに、

「我ら堺衆の望みは、これまで通り、外つ国々の交易を、会合衆のみにてお任せ下さること。ひとえに堺の安堵にござります」

「よう分かった。先ほど申した通り、堺の街はこの霜台が我が名に懸けて守ってやろうぞ」

「ありがたきお言葉、堺の全民、感涙に咽ぶことでしよう」

「天下の名物、この茶入れにて、明日にでも茶の席を設けようぞ」

「有り難き仕合せ、恐悦至極にござりまする」

二人は揃って平伏した。

しばし、歓喜に浸っていた弾正が一寸顔を曇らせ、

「さて、堺の街を守るには、我が権勢が畿内一円に、いつまでも続いておらねばならぬのだが」

「何かござりまするか」

勘の鋭い宗久が弾正の言葉を待った、

「ふむ、わしの主人、三好長慶様が、力をつけたこのわしに、何かと気を揉んでいるようだ」

「お館様が強大になることは長慶様の御為^{おん}。かえって安心なされるはずでは」

「さにあらず。嘗てわしは長慶様に付き従い、管領の細川晴元様を討ち、公方義輝公を追放した。長慶様が京を支配して、新しき管領になられた時は、このようなことができるのかと、わしは狂喜したものだ。だが、今思えばこれが戦国の習いよ」

「お国替えがありましたようや」

「それよ、わしの力を削ぐ為にあるやも知れぬ」

「お国替えになれば、お館様のおられぬ堺はどうなりましょう」

宗久が厳しい眼をして尋ねた。

「案ずるな。長慶様がそんな考えを起こさぬように、わしは今のう

ち、もつと強固な、力を誇示できる、壮大で美しい城をこの大和に築く。そのように考えておる」

「はて、城を築けば国替えがないとは」

と、訝る宗久に、

「ふふふ、いざとなれば、ということじゃ」

弾正は、含みのある言葉を吐くと、彫りの深い顔にまた笑みを作り、

「その時には堺衆にも力を借りることになろう」

ここで、弾正は背筋を伸ばし、後方に座っている身分低い風体の二人に声を掛けた。

「後ろに控える兩名、待たせたの」

老臣友照が向き直り、

「今井殿、御前に」

受けて、宗久が、

「これに控えし者、お館様の御下命により、近江の国より呼び寄せましたる者にございます」

「よし、双方名乗るがよい」

「穴太衆石工頭、石切伝衛門、お館様にご挨拶を述べられよ」

宗久に促されて、年老いた方の男が、低いがはっきりとした声
で、

「初めて御意を得ます、近江穴太衆の石切伝衛門と申します。ま
た、これにおりますのは、倅、千四郎めにござります。身分低き者
ゆえ、ご無礼の段、平にご容赦御願ひ奉ります」

と一気に口上を述べた。

弾正は鋭い目つきで二人を睨んでいたが、やがて、優しい顔に戻
り、

「伝え聞く石工の民、穴太衆を束ねる石切伝衛門とは其の方か。遠
路よう参った」

と声を掛けた。

「伝衛門、年を聞こう」

「はい、もう少しで齡六十になります、また、倅千四郎はこの年
二十歳 になります」

「千四郎とやら、若いもう、父伝衛門の石積みのご事は聞き及ぶが、
其の方はどうじゃ」

代わって伝衛門が、

「石積みは今、教えておるところですが、倅は治水、水利に目が利

きまする」

「それは大事なことじゃ。城築くに治水は要、水利は城の宝、水無くして城落つる」

そして気がついたように、

「千四郎とやら、其の方職人ながら、大太刀を腰に差しておつたと先程聞いたが、石工たちは太刀を持って戦に出るのか」

「畏れながら、言上仕ります」

と、初めて千四郎が口を開いた。

「私共石工は武人に非^{あら}ず、ゆえに戦場には出^{いで}ませぬ。されど築城のみぎり、警護の役、組下に入れられますれば、太刀は城備えの為、また身を守る為、持ちましてございます」

「ふむ、道理である」

弾正は頼もしそうに若者に目をやりながら、

「さて、最前より聞いておつたであろう。わしは近く、この大和に城を築く。いろいろ考えもあつての、穴太衆の其の方ら呼び付けたのもそのこと」

弾正は立ち上がり、

「何処に建てるはまだここでは言えぬ。爾今、築城については、ゆ

るゆる話す。両名共これより城内に留まれ。ところで宗久、宗易、わしは近いうち、久し振りに堺に参る」

「これはこれは、堺の民、お館様御来堺に、喜びで沸き立ちましよう」

「天主教に帰依した会合衆がおるそうな」

「はい、日比屋了慶と小西隆佐にございます」

「法名があるのか」

「はい、彼らは霊名と申しております。了慶がサンチヨ、隆佐が確かジョアチン」

「切支丹伴天連、ザビエルはまだ居るのか」

「いえ、博多に戻り帰国の準備にございますが、代わりに同行して堺に参った、伴天連ビレラとアルメイダが住んでおります」

「布教の為、天主教の寺院を建てると聞いたが」

「私どもは南蛮寺と申しておりますが、了慶たちは教会と呼んでおります」

「天主堂とかいう高楼を作るとな」

「よくご存知で。その通りですが、まだ建ててはおりません」

矢継ぎ早の質問に宗久は落ち着いて答弁していた。

「わしが堺に参る時、その伴天連を召し出せ。なに心配はいらぬ、わしは、かの教えは信ぜぬが排除などはせぬ。西方の遠国^{おんごく}の知識は我らに考え正す事多し。鉄砲の視察と天主堂の仕置きも見たい。此度の築城の糧にするのよ。また会合衆とも茶の湯を楽しもうぞ」
宗久も宗易も緊張で身を硬くし、頭を下げた。

「千四郎、其の方に命じる。わしが堺に参る際、宗久のもとにおれ。堺にて申し付ける事あり」

笑顔が消え、きつと鋭い目つきになった弾正は宗久に近づき、

「伴天連のもとで医術を習う者ありと聞いたが、其の者、他国に出すでない、よいな。わしが参った折、その南蛮医師と其の方に話すことがある。大事なことゆえ、今は其の方の胸に秘めておれ」

と、囁いた。そして大きな声で、

「さあ、酒宴じゃ皆の者、穴太衆の両名も同席許す。今宵は楽しく飲もうぞ。大名物じゃ、茶入れじゃ、九十九髪茄子じゃ、嬉しいぞや」

弾正の陽気な高笑いが城内広間に響き渡った。

松永弾正忠久秀、のちに下克上を体現した梟雄としてその名を馳せた。

女色に耽る、残忍、凶暴、狡猾な人物と諸国に恐れられていたが、反面、美男の聞こえ高く、優雅な立ち居振る舞いで、連歌に通じ、茶道にも長けた教養人であった。

領国では善政を敷く為政者として、領民たちから、官位の唐名である霜台様と呼ばれ慕われていた。

深夜、弾正は閨房に上機嫌の酔った足取りで入ってきた。

「起きていたか」

「はい、お待ちしておりました」

お妖の方が身を寄せる。

「今宵は嬉しいぞ、こなたの身を抱かねば気が静まらぬ」

「何ぞ、嬉しき事おありの様子」

「ふうむ、大ありじゃ、早う抱きたいぞ」

「夜毎、抱かれるのは嬉しゅうございますが、この身体、飽きませぬか」

「飽きるものか、阿波の国にて初めてこなたを抱いて以来、物狂うておるわ」

弾正は形の良い乳房を慣れた手付きで揉みながら、口を首筋に這わせてゆつくり身を倒してゆく。

「ああ」

妖しい声音を引いて、お妖の方が身を委ねる。弾正の耳元に息を潜め、

「お館様は阿波の戦場にも、女子の私を連れてゆかれました……それも一度ならず……ああ……」

「おお、陣中にて衆道はわしは好まぬ。やはり飛び切り美形の、あなたでなければ」

「あ……あ、あ……」

手を下げ、お妖は身を開き受け入れると、

「おお、また陣中であなたを思いつきり抱くぞや」

「あ……戦がありまするか」

お妖の白い裸身に被さりながら弾正が叫ぶ。

「あるぞ、あるぞ、戦場が楽しみじゃ」

「身も心も火照らせ、弾正はお妖を尽きることなく執拗に攻め立て、やがて、果てると、深い眠りについた。」

この乱世に築城の術を持って各国の領主たちに雇われ、砦、城郭の地取り、縄張り、普請、作事などを請け負う、石工の特殊技能集

団があった。

近江の国周辺に集落を持ち、普段は自作自農、小豪族のような形成集団である。当時、この国内で唯一繁栄を誇る、小独立国家的商人の街、堺と密かに交流し、支援を受けていた。衆を頼った行動で、彼らは時の戦国武将たちから穴太衆あのをうしゅうと呼ばれ、石工ながら畏敬の念を持たれていた。

穴太衆も仕事は分担されていた。馬渕村に住む石工集団は、主に山河より切り出した石を細かく割り出し、また切るなどの専門部門を引き受け「馬渕者」と呼ばれていた。

また一方の穴太村に住む石工たちは、これを運搬し、城郭の石積みなどの労働を一手に引き受ける「穴太者」と言われた。これらを総称して、他国の者たちから「穴太衆」と呼ばれていた。

その馬渕者と穴太者を束ねる家柄があり、その名を石切家、当主、伝衛門であった。

伝衛門は馬渕、穴太の両地から優秀な人材を募り、築城の際の地取りから縄張り、治水、普請、作事などを学ばせた。他に運搬の体力作り、護身の武術なども習得させた。これら専門の石工は、石積み、構築技術を持って戦国大名のもとで働いた。伝衛門は現地に行

き、職人たちの身の安全を取り付け、築城の作業者たちに指示を与え、無事、完成まで見届けるのが仕事であった。

「千四郎、起きておるか」

伝衛門がそつと声を掛けると、

「はい、起きております」

と、千四郎の答えが返ってきた。

「起き上がらず、そのまま聞くがよい。ここのお館様は恐ろしいお方と聞いてはおるが、なかなか以って頭の切れる、懐の深いお人のようだ。我らへの身分を越えた応対でそれが知れる」

千四郎はうつすら目を開けたまま、じつと伝衛門の話すことを聞いていた。

「これからは戦が変わると、ここのお館様が話しておられたが、わしもそう思う。種子島より堺に渡り、工夫を重ね、命中も殺傷力も秀でた鉄砲が世に出るぞ。伝え聞くところでは、量産も可能なりとの話じゃ。これからは我ら穴太衆も忙しくなるぞ」

千四郎は父伝衛門の言葉に聞き入っている。

「城や砦はこれまでの櫓や土塁ではなくなるぞ。壕も大きくなるぞ。これからは石で造る城壁じゃ。わしの長年の工夫の石積みが役に立

つ日も近い。なぜなら鉄砲に強い城でなければならぬからじゃ。ふふ、石垣ならば火力にも耐えられる。もし城が焼け落ちても石垣は残る。残っておればまたそれに乗せて城が造れる」

ふうつと息をついて、

「石垣ならば百年の後も耐えて残ろうぞ」

千四郎がむっくり起き上がり、

「父御、私はこのご領主様が何か大きなものを考えておられるような気がします。堺には参りたいと思います」

「よう言うた。堺の地で何か学ぶことがあるやも知れぬ、行くがよい千四郎」

千四郎と伝衛門は、後は口をつぐみ、それぞれがこれから起きる先の先に思いを巡らしていた。

今井宗久と千宗易一行は、信貴山城主、松永弾正より手厚い歓迎を受けた。帰途に就く時は弾正より特別通行札を貰い、護衛の兵士が付けれられ、丁重な見送りを受けて、堺に向けて帰り路を急いだ。

「宗易さん、此度は何か大きな動きがあるような霜台様の様子でしたな」

宗久が堺のお国訛りに戻って話し掛けた。

「はい、近いうち戦があるような。新しき強固な城を造るとは、そのことでありましょう、私ら堺衆は街を固めて、じつと成り行きを見るだけです」

と、宗久に答え、続けて、

「何処に戦が起きても、私らは、鉄砲や薬や兵糧、武具、衣料、何でも商いになります。自由にやらせて貰いましょう」

「おっしゃる通り、渡来品は高貴なところへ、武器類は戦好きの名たちに。その布石が九十九髪茄子の茶入れ、あのお方は物分りが良い」

そう言いながらも内心、宗久は疑問を持っていた。

京の都と堺の新しき盟主として実力者にのし上がった弾正が、これより主力となる鉄砲という武器を、堺が他の戦国大名に売ること、をいつまで容認できるか。いざとなれば、弾正と事を構える事態が生じて、持ち前の才智で乗り切れる自信を持っていた。

堺の会合衆は、その一人ひとりが侮れぬ財力と知恵を持っているのだ。

この街の商人たちは、逞しい商才と潤沢な財力と衆合の知恵で、

この戦国の世を乗り切ってきた長い歴史があった。

宗久がまた宗易に話し掛けた。

「この春が過ぎ、夏頃は堺はちと騒がしくなりそうですな」

「はい、帰りましたら三十六人全ての会合衆に集まって貰いましょう。忙しくなりますなあ。いざまず無事に堺へ」

宗易が答えた。

「おお、堺にて、堺にて」

宗久は先方を見据え、

「早う帰りましょうぞ」

と、力強く答えた。

和泉の国、堺は京の都にも近い港町で、中世中頃より独立国ともいえる自治と自衛で発展してきた商人の街であった。

海に反する陸地には、この乱世に相応しい広大な壕を巡らし、防衛のため数百名の傭兵を常駐させていた。

財力を誇る彼ら商人は、事あれば数千の兵を集めることができ、この地を狙う戦国大名も迂闊に手が出せない武力を秘めていた。

この頃堺は、明、高麗、呂宋ろそん、シヤム、安南などの近隣諸国及

び南蛮貿易によって異常なほど繁栄し、街は活気に溢れ民衆は自信と誇りを持っていた。

南北朝以来、この国最大の都市として富裕と文化を誇示する堺は、会合衆と呼ばれる三十六人の豪商、富商たちによって運営されていた。

その会合衆でも飛び切りの実力者で、茶人でもある天王寺屋津田宗及の屋敷に、数人の会合衆の豪商たちが集まっていた。

大和信貴山城から帰堺した今井宗久、千宗易も中央に座っていた。この二人は津田宗及とは茶の同門である。他に日比屋了慶、小西隆佐、納屋助左衛門、橘屋又三郎たちが神妙な面持ちで座っていた。

中央に座していた宗及が声を上げた。

「堺の代官、松永弾正様、昨日来堺され、警護の方々共に宿舎の南宋寺に入られました」

一同はすでに承知のことと、静かに聴いている。

「我ら会合衆、うち揃ってお出迎え致しましたが、その折、弾正様が私を別室に呼ばれました。そこで弾正様の御用向きを伺い、今日お集まりの皆様には私からお伝えするよう仰せつかって参りました」

少し太り気味ではあるが柔和な面差しで、いかにも頭の切れそう

な宗及が、

「先ず魚屋いしやさん」

と声を掛け、

「魚屋さんには南蛮の城の絵図を手に入れるよう、先年弾正様からお達しがあつたそうですな」

魚屋いしやと呼ばれた痩身で日に焼けた、精悍そうな壮年の男は、実は納屋助左衛門と言い、堺の南蛮貿易の中心人物であつた。

呂宋、シヤム、安南方面に回船を所持して自らも渡航し、海外の紙、織物、薬品、焼き物、酒類、ありとあらゆる産物を堺にもたらしていた。

堺の民からは呂宋助左衛門とも呼ばれ、海外南方倭人街の構成員の一人でもあつた。

「はい、すでに何本か持ち帰っております。また、別にお申し付けの酒類なども用意してあります」

納屋助左衛門が力強く答えた。

「それは結構」

と宗及は頷き、

「明日、早速お届けするように」

と言って、隣の橘屋又三郎に目を向けた。

「橘屋さん、弾正様が、あなたのところでも新しく改良された鉄砲の性能を確かめたいと仰せられ、射撃場にご案内せよとのことでございます。また、宗久さんのところにいる美濃からのお武家さんも連れて来るようにとのことです。なに、別に危害は加えぬとお達しです」

「分かりました」

会合衆の中では長老格の白髪頭の老商、橘屋又三郎が短く答え、宗久も無言で頷いた。

「日比屋さんと小西さん、お二人には伴天連ビレラを伴い南蛮寺をご案内するように、また天主堂の設計図などをお見せするようにとのことでした」

「承知しました」

日比屋了慶、小西隆佐が同時に頭を下げた。いずれも穏やかそうな澄んだ顔付きであった。

「次は、宗易さん、あなたには会合衆を一同に集めて、弾正様をお招きする大茶会の手配をするようお申し付けがありました。それにかかる費用は会合衆がそれぞれ負担いたします」

「はい、承りました」

宗易が静かに答えた。

「さて、宗久さん、あなたは近江の石工、穴太衆の若頭と、伴天連の通弁も兼ねる南蛮医の市橋庄助さんを連れて、南宋寺に参られるようにとの仰せでございます。あとで伴天連ビレラも呼び付けてあるそうです」

「委細、承知しました」

宗久が答えた。

「さて私ですが、弾正様から改良された鉄砲の性能如何では五百挺の注文があり、その値踏みを皆さんと話し合って報告しなければなりません。他に矢銭を供出するように言われました。これらの金と此度の歓迎の費用、いろいろ金の絡む話の取りまとめを仰せつかりました」

宗及はうんざりした様子で話した。

「矢銭とは、戦でもあるのでしょうか」

と日比屋了慶が尋ねた。

「たぶん近いうちあるのでは。そうでなければこの堺に矢銭など掛けてはきません」

と宗及。さらに、

「権謀術数に長けた弾正様のこと、戦をせずとも裏で何かを仕掛けるのでは」

じつと聞いていた宗易が、

「大和に城を建てるとか、何か大きな企み事がありそうです。皆々様、我ら会合衆はより結束を固めて、情勢を見極めねばなりません」ときっぱり言い切った。

日が替わって、警護の供を連れた弾正が、南宋寺の宿舎を後にした。姿を現したのは、堺の街外れに設けられた、鉄砲の試射を行う鉄砲鍛冶射的場であった。

夏の日差しを浴びて弾正は、軽装で扇子をばたばたさせて暑さを凌いでいた。

「これはこれは、お館様、わざわざのお運び、又三郎、天にも昇る嬉しさにござります」

「橘屋、息災のようじゃな、おお、清右衛門もおるか、皆も元気そうじゃのう」

顔馴染みの出迎えを受けて、弾正は愛想良く笑顔を見せていた。

橘屋の隣に小柄な人物、芝辻清右衛門が控えていた。

今、堺ではこの芝辻清右衛門が鉄砲部門の総元締めとして、堺、会合衆の重要人物の一人であった。

早速、数名の鉄砲鍛冶が試射のいでたちで持ち場に立ち、一丁ずつ構えては撃ち、また取り替えては撃つ試射が始まった。

耳を劈く銃声に、驚いた鳥の群れが遠くに逃げ去って行く。

一回目の試射を終えてしばしの休憩の時、的の方をじっと鋭く見つめている弾正に、橘屋又三郎が近づいて畏まり、

「お館様、今井宗久宅に滞在しております、明智十兵衛様をお連れしました」

と告げた。

弾正はゆっくり顔を向け、又三郎の横に膝をついて頭を垂れている屈強そうな武士をじっと見つめた。そして、

「斉藤道三公の家中の者か」

と声を掛けた。

「初めて御意を得ます。元斉藤家中、今は浪人の明智十兵衛光秀にござります」

「浪人、ほう、美濃の浪人と申すか」

問われて明智十兵衛は黙って頭を下げた。

何事か起きた際の、主家に及ばぬ配慮であると弾正は見通していた。

「では尋ねる。元主人の道三殿はご息災かな」

と笑みをたたえて語り掛ける。

「は、至ってご健勝にござりました」

「懐かしいのう、このわしは道三殿とは旧知の仲であった。今では、飛ぶ鳥落とす勢いのご武運と聞いておる、めでたい極みである」

「はは」

十兵衛は用心深く、余計な口は利かぬように心がけていた。

「明智十兵衛とやら、そなたに渡したき物がある。受け取って貰いたい」

そう言って弾正は、供の者に、ある物を目の前に差し出すように促した。

立ち上がった弾正が、

「この者と話がある。暫く下がっておれ」と命じた。

警護の武士と鉄砲鍛冶たちが退いて、二人になったとき、弾正は

置いてある包みを自ら解いた。

少し短めの脇差であった。安心させるように弾正は十兵衛に、

「まずこれを持って」

と手渡した。

「わしの話聞くがよい。これはの、道三殿がくれた脇差である。

若き頃、ある戦場で道三殿と知り合い、共に密命を受け、その任務の中わしは深手を負い、動けぬ身体に成り果てた。わしの太刀は折れて使い物にならぬを見て、道三殿がこれをわしに手渡した。切り傷に効く軟膏薬をたっぷりわしに塗ってくれた後、逃げ延びるのが無理なら、これにて自害せよと言った。運が強ければ、またどこぞの戦場であいまみえようぞ、死ぬな、と叫んで道三殿は走り去った」

受け取った脇差を握り締め、十兵衛は弾正を見上げた。

「そなたも浪々の身とはいえ、いずれ国許に戻るであろう。松永弾正からのものであると斉藤家の方に届けて欲しい。道三殿に首尾よく渡れば思い出してもくれよう。この通り生きておったとな。宗久のところにも身を寄せているとはいえ、浪々の身なれば何かと不自由であろう。これは美濃に帰る折の我が領地の通行札と少しばかりの路銀じゃ。遠慮のう受け取ってくれい」

と自ら手渡した。

十兵衛は押し頂いて、重たい口を開いた。

「弾正忠様のお心とお預かりし物、この明智十兵衛身命に懸けて、必ずや近いうちに美濃の国里にお届け仕ります」

と叫んだ。

「うむ、頼むぞや十兵衛」

弾正が明るく答えた。

真夏の日差しを避けた大樹の下で、松永弾正と明智十兵衛光秀はそれぞれの思いを胸に、静かに先方を見つめていた。

堺に来てから弾正は、夏の暑さを物ともせず、短い日程の中精力的に動いていた。

今朝は早い内から供回りを連れて、南宋寺を乗馬にて出発すると、日比屋了慶が別宅に新しく建てたという天主教の寺に向かった。

日比屋了慶は会合衆の中で最初に天主教に帰依し、洗礼を受けた人物であった。霊名はサンチヨ。豪商で鳴らす了慶は宣教師ビレラの布教の為、自らの別宅を作り直し、教会と呼ぶ寺院を建てた。そこに天主堂という楼閣を造り、神なる天主を祀っていた。

弾正を出迎えた宣教師ビレラ、日比屋了慶、小西隆佐、他に主だった信者たちが門前に平伏すると、馬上より弾正が、

「出迎え大儀」

と声を掛けた。

降り立つと、早速寺院内に案内され、狭い教会の中を時間をかけて見聞した。了慶や隆佐たちは、弾正ほどの大名がこんなちっぽけな俄か作りの南蛮の寺院に何の興味があるのだろうかと不思議に思っていた。了慶や隆佐たちの一生懸命の説明や、宣教師ビレラの善意に満ちた言葉を、弾正は真剣に聞き入っていた。

どうやら天主堂の造りに興味があるようだとして了慶は思った。

弾正は教会の見聞を終えて帰路に着く時、宣教師ビレラに天主堂などの設計図を今夕宿舎に持参せよと下知し、帰っていった。

その夜、宿舎南宋寺の書院で弾正の前方右手に、切支丹宣教師がスパル・ビレラ、その横に南蛮医師市橋庄助が座り、反対の左側に今井宗久、そして穴太衆若頭石切千四郎が座っていた。

千四郎は堺に来てから緊張と驚愕の日々であった。

海を見るのは初めてではないが、港に停泊する大きな回船にまず目を奪われた。華やかな衣装、運び込まれる異国の品々、そして初

めて見る異国人伴天連。教会、天主堂にも目を瞠り、鉄砲の数にも驚いた。商人が上に立って街を治める不可思議な世界。否、街ではなく、これは千四郎には考え及ばぬ領国であった。

座の中央に、納屋助左衛門より届けられた西洋の品、異国の城郭を描いた絵図が数枚広げられていた。

弾正は助左衛門が別途に納めた異国の酒を、手ずから杯に注ぎ、味を楽しんでいる。

「これは美味である。話が終われば其の方たちも相伴せよ。さて、話を続けよビレラ」

と上機嫌で語った。

宣教師ビレラは、本人が持参した天主堂の見取り図の説明をし、また今開かれている城の絵図、特に城壁などの構造を問われるままに、全知を傾けて、真剣に誠意を持って答えていた。

弾正は、天にも届く高樓の城と、堅固で高く聳える城壁、壕などをしげしげと見つめている。

「教会とか申す寺院以外でも、城には天主を祀っておるとはのう」
弾正は一人考えていた。

——それにしてもこのビレラなる伴天連、我が国の言葉をこれほ

ど巧みに操り、側に控えし通弁の南蛮医師師など不要であった。

彼は心底思い、それを口にした。

「この国の言葉が巧みじやの」

言われてビレラが、

「ありがとうございます。教えを広めること、お殿様に認められ、感謝の気持ちでいっぱいでございます。私の知っていることなら全
てお話し致します」

と答えた。

弾正は黙って頷き、

「千四郎」

と、食い入るように見聞きしている千四郎に声を掛けた。

「この外つ国の城構え、如何に見た」

千四郎は身を竦めて、

「は、誠にこのように、全てが石を積んで、できているのでしょうか、このような石積み
の技法は、我ら穴太衆にはございません」
と答えた。

ビレラが千四郎に向かって、

「私たちの国の城は、全て石を積んで造ります。高く高く積みます。

そのため石は積み易く、大きい四角の石、小さい四角の石、これらを砕いたり、切ったりして、たくさん、たくさん積み上げて造ります」

「その石積みで崩れたりしないのでしょうか」

千四郎が尋ね、

「大事な箇所は、鉛と鉄具を使って、くっつけたり、巻いたり、押さえたりして、頑丈に補強するのです」

「鉛、鉄具、異国ではそんな技法があるのですか」

千四郎は興奮して言った。

やりとりを聞いていた弾正が、

「全て石で積まずともよい。わしに考えることあり」

と遮り、ビレラに向き直った。

「城造りのこと、其の方の持っている限りの知識を、この千四郎に教えよ。石の大小、平らなること、切り方、乗せ方、運ぶ方法など全てじゃ」

ひとしきり終えた頃、弾正が、

「市橋庄助、そちは伴天連の妖術を用いて、病人を惑わすとの噂が立っているがどうじゃ」

と、にやりと笑って声を掛けた。

驚いた市橋庄助が、

「滅相ありません。私はビレラ様に命を救われました。せめて恩返しにと、医術をビレラ様に教わり、病人を診ております。妖術など、恐れ多いことにごさいます」

宗久が笑いながら、

「お館様の、お戯れのお言葉です」

と庄助を落ち着かせ、

「お館様、この南蛮医師庄助は、これまでの医術とは違う方法にて、病に冒された民を数多く救っております。治りが早いもので、そのような陰口が叩かれます」

「うむ、医術に天賦の才があると聞いておる」

と弾正は頷き、

「其の方に尋ねる。古来、毒には毒を持って制すと言う言葉がある。言い回しは兎も角、語源に当たる物が、南蛮の薬にもあるか」と尋ねた。

庄助は暫く考えてから、

「あります。劇薬を用いて、病毒を消し去る方法でございます」

「うむ、その劇薬の用法を知りたい。また劇薬を消す方法もあると申すか」

「はい、されば、これらは使い方一つにございます。よほど病を知る名医でなければ使えませぬ。少しでも誤れば命取りになりますゆえ」

「相分かった。其の方、わしが国許に帰るまでに、その秘薬と、調合の具合をよくよく調べ上げたのち、これに届け出よ」

「さ、それは、なにぶん劇薬の事ゆえお許し下さりませ」

庄助は躊躇した。

「主命である。庄助、わしに教えよ」

「分かりました。やってみます」

と庄助は仕方なく答えた。

「皆の者、大儀であった。明日は宗易の茶亭で会合衆との楽しい茶会である」

弾正は言い切ってから、宗久に向かって、

「津田宗及に矢銭の供出を命じたが、これは堺のためである。安心せよ、堺衆にこれ以上の負担はかけぬ。わしが見るところ近々戦が起きる。諸国の大名はこの堺を狙ってくるであろう。わしは堺の代

官である。事あらばこの堺を守る為、万の軍勢をここに差し向けて民を守らねばならぬ。わしが堺を守る限り、この街は安堵である。堺の仕置きは、これまで通り堺衆に任せる。堺が潤えば我が領地も栄える。会合衆とわしは一心同体、いや一蓮托生かの。はははは」
つられて一同笑顔を作った。

その後、茶会を終えた五日後に、弾正は慌しく馬上より見送りの民衆に手を上げ、警護の兵士を連れて大和の国に帰っていった。その供の行列の後尾に、穴太衆石切千四郎の姿があった。

元号が永禄に変わり、奈良興福寺勢を破って大和の国を完全支配した松永弾正は、従四位下、弾正少弼に叙位、昇進して山城守に任官された。

それを機に、大和、奈良北郊にある眉間寺山と、これに続く多聞山を、新しい城の拠点と定め、築城の地取りと縄張りに取り掛かった。

近江の国からは馬渕者、穴太者の選りすぐりの石工たちが動員され、穴太衆として多聞山に集結した。

治水調査の為、千四郎たちは山々を歩き、水利の確保、河川から

の引水、壕の大きさ、広さ、深さを丹念に調べ上げ、計画を立てていた。

「よいか、この城の名は多聞城と名付ける。多聞とは多聞天、武の神、毘沙門天の別称である。天主堂のように、高層の楼閣を築き、わしは毘沙門天を祀ろうぞ。これまでの高き物見櫓や、武器庫の矢倉でもない、わしが住む四層の楼閣である。これに多聞閣と名を付けた。天に届くほどの高楼である。伴天連共は、天主閣と言うかも知れぬ。さにあらず、天にも届きて、天上を守る、天守閣と呼ばせてみましょうぞ」

天を守る楼閣、叫んだあと弾正は、己の言に酔い痴れていた。

大和の国を完全に平定し、しばし戦乱が収まるのを待っていた弾正は、聖武天皇と皇后の陵墓と伝えられる眉間寺山と多聞山の広大な地域を選び、多聞城の築城に取り掛かった。

その山下には、壕や土塁を巡らし、要所、要所に石垣を築いた。その上を白亜の長屋塀が幾重にも取り巻き、丘陵は石塁で囲み、その上長櫓を巡らせ、弾正はこれにも多聞櫓と名を付けた。

これらの築城の為に召し出された石切伝衛門、千四郎父子、及び穴太衆は、土木工事に属する者は普請奉行下に、建築工事に属する

者は作事奉行下にそれぞれ配属され、昼夜を分かたず働いていた。

伝衛門が工夫した石積み法が大いに本領を發揮、新たに考案した石積みも試され、城郭の基礎工事は少しずつ進んでいた。

石積みにもいろいろあった。自然石をそのまま使い荒々しきを見せる野面積み。鉄槌で石の角を取り、平たくして積み上げる打ち込み接。鑿^{はぎ}で石を削って細かく組み合わせる切り込み接。これらに出来上がった外形の見方から、乱れ積み、布積み、亀甲積みなどと呼ばれる石積みがあった。これらが伝衛門の指示で造られていった。

千四郎は仕事の合間に考えていた。堺の伴天連ビレラに教えられた、鉛を使った石の接着法「鉛ちぎり」。鉄棒や鉄鎖、鉄大鎚^{おおかすがい}などの鉄具を使用する「鉄繋ぎ」。

先ずどうやって鉛を手に入れるのだろうか。この戦国の世にはとても不可能と千四郎は思った。だが堺衆ならどうであろう。堺の潤沢な財力ならば、鉛、鉄道具は揃えられるかも知れぬ。一度やってみたい、試してみたい。きっと百年の後までも残る強固な石垣ができるのではないか。いろいろ考えて、千四郎は胸を躍らせていた。

そんなことを考えているとも知らず、伝衛門は、

「進みが遅い。おそらく完成には予測より数年余計にかかるじやろ

う」と千四郎に言った。

「私もあと七、八年はかかるような気が致します」
流れる汗を拭いながら千四郎が答えた。

日焼けした二人の顔が汗で光り、輝いて見えた。

数日して、美濃の国に放っていた細作より、危急の報告が弾正のもとにもたらされた。

蝮と呼ばれ恐れられた梟雄、斉藤道三の死であった。

先年道三は、その子義龍に家督を譲って隠居していた。それ以後父子の仲が急速に悪化、とうとう義龍が父道三に討伐の兵を出したのである。隠棲していた道三は手勢を率いて応戦、敗れて長良川にて自害して果てた、との報せであった。

聞き終えて弾正は、

「道三殿自決……」

と呟いた後、しばし絶句していた。

やがて気が付いたように、

「はて、堺で出会った明智十兵衛なる者はどうしたであろうか。道三殿と共に果てたか、あるいはどこぞに落ちていったか……」

この夜、お妖の方も退け、弾正は寝所の城窓から夜空を眺め、静かに物思いに耽っていた。

——父子、兄弟、親族といえども、この世は古来より子が親を討ち、弟が兄を殺し、親族を滅ぼす。ましてや主従関係など、裏切り背反は戦国の常。道三殿も義龍の暴挙を予感していたのであろうか。やはり覚悟の自決であろう。我が倅、久通はまだ若年だが、家督相続の後、わしを追うであろうか。三好長慶様は……。

そう考えた時、脳裏に長慶の嫡男義興の顔がぼうつと浮かび上がった。夜はしんしんと静まり、弾正は虚空を睨み付けていた。

多聞城が穴太衆たちの懸命の作業で形造られている頃、奈良山中の丘より城を凝視する武将がいた。尾張清洲城主、織田上総介信長であった。僅かばかりの供揃いで上洛、二条御所にて將軍義輝に拝謁を果たし、その帰国の途であった。宿敵斉藤義龍の刺客の目を逃れるべく、帰りの道中を迂回、奈良に入り、この丘にて遠方に光り輝く白亜の多聞城を望んだのであった。

「あれが音に聞く松永弾正の多聞城か」

と呟き、

「あのような城、初めて見る、あの四層の楼閣、見事である。完成の暁には扶桑第一の名城となろう。さすがは松永弾正、畿内随一の武力を誇るこゝやある」

この織田信長という武将は、若い精悍な体つきと、涼しげな顔立ちながら、他を圧する気迫が漲っていた。鋭い眼光を向けたまま、信長はしばしその場に佇んでいた。

「いつの日かあの城、奪い取ってくれる。皆聞け、いつか我が物になる日が来よう」

やがてくるりと踵を返すと、足早に消え去っていった。

永禄四年、事変が起きた。

新しい管領になった河内飯盛山城主、三好筑前守長慶の居城に早馬の伝令が届いた。

実弟、十河一存の急死の知らせであった。

近年、患うことが多く、氣力がやや衰え始めていた奸雄、三好長慶は、頼みとする松永弾正が力を付けすぎ、今や嘗てのように手足の如く使うことも叶わなかった。その為には弟の実休（義賢）と一存にその執政を委ねようと考えていた。

だが計画は潰えた。一存が、戦の古傷を癒す為に出向いた有馬温泉の湯治場で、吐血して倒れた。薬師くすりしが駆けつけた時はすでに息が無かった。夥しい量の吐血であったという。

十河一存は反松永弾正の急先鋒として、主家を専横せんとする弾正を、武力で追討すべしと兄に迫っていたのである。

松永弾正の野望による事変の始まりであった。

この時はまだ弾正の密命を受けた乱波者たちによる毒殺であることは、まだ誰にも知れることなく、一存は落馬による急死とされ、葬儀が行われた。

弾正は刺殺などの、公に知れてしまうことの多い暗殺ではなく、あくまでも病死とされる毒殺を計画していた。

長慶は弾正を警戒していたが、嫡男義興が、父にも勝るとの噂通り、戦国大名の風格を見せる程の逞しい、気骨のある成長ぶりになり、戦国大名の風格を見せる程の逞しい、気骨のある成長ぶりに、いずれは弾正も義興の足下にひざまずくであろうと考えていた。だが油断であった。

永禄五年、長慶のもう一人の頼りにする実休（義賢）が、内乱制圧の為出陣し、休息の陣中で、やはり同じように、多量の血を吐いて悶絶した。

長慶は二人の弟の度重なる死を不審に思ったが、まさか弾正の仕業とも言い切れず、警戒を強め、いずれ弾正を呼び付け、始末をつけようと腹を決めていた。

多聞城の築城が進むにつれ、弾正の野望もだんだん大きく膨らんでいった。

主家である長慶に反旗を翻す決意も、この時には決定的なものになりつつあった。

弾正は、いずれ己に立ちはだかるであろう長慶の嫡男義興を、今の若いうちに芽を摘み取らんと考え、暗殺の手を伸ばした。

永祿六年、三好義興を、居城である摂津芥川山城にて毒殺。

沈着にして豪胆の誉れ高い義興は、親に先んじて急死。この時は流石の長慶もがっくりと落ち込み、病の床に臥せってしまった。

兵を起こそうにも、身体が不自由で、起き上がることも叶わず、悔し涙にくれていた。

多聞城が少しずつ城郭の形を成してきた。

千四郎はその美しい石垣、長屋櫓などの一つ一つに弾正の創意工夫が成され、見事に結実していくのを、毎日驚きの目で見ていた。

例えば、櫓の狭間さまと呼ばれる窓は、弾正の新しい発想で造られていた。これらの窓は、戦の時代を変えるであろう鉄砲の備えとして、鉄砲狭間、弓矢狭間と名付けられた。さらに、あかぎと呼ばれる窓が作られた。すなわち、外側は狭くして、敵からの射撃を防ぐ工夫が成される一方、内側は広くして、鉄砲や矢を向ける角度が自由に取れる仕組みである。弾正の隅々まで気配りの行き届いた築城術に、千四郎は感嘆の声を上げていた。

そんな千四郎であったが、故郷穴太村から交替でやって来る石工たちの噂を聞いて、飛び上がらんばかりに驚いた。お館様が主家の長慶様の子や弟たちを毒殺したというのである。

こんなにも雄大で荘厳で美しい城を築こうとなされるお館様が、そんな恐ろしい計画を実行される人物にはとても思えなかった。

千四郎から見た領主松永弾正は、築城の天才であった。

摂津越水城から河内飯盛山城に居を移してからというもの、災難続きの三好長慶は、すっかり心身共に限界に達する感であった。

嫡男義興を亡くし、病床に臥せる長慶に代わって三好家を治めるのは、残る弟の安宅冬康であったが、長慶はこの弟とは反りが合わ

ず、日頃から遠ざけていた。

家老職の松永弾正が大物になりすぎて足下におらぬ今、領国を守るには早急に跡目を決めねばならぬ。冬康にも男子がいたが、父子とも嫌う長慶は、窮余の策として、非業の死を遂げた弟十河一存の実子、義継を養子として家督を継がせた。

これを不満とした冬康は兄長慶を亡き者にせんと画策し始めた。

病床の中から長慶は、冬康の不穏な動きを察知した。不吉な予感に駆られ、恥も外聞もなく、大和信貴山城に密使を送り、弾正に助けを求めた。

条件は後嗣、三好義継の後見人として、自分が亡きのちも弾正に三好家の執政を委ね、義継成長の暁には攝津の国を禅譲するとの、なげやりとも言える条文であった。

永禄七年、安宅冬康、初雪が積もる居城の庭先にて血を吐いて死んでいるのを、朝方、家臣に発見された。

同年、三好長慶は益々病状悪化、精神錯乱状態になり、居城、飯盛山城にて悶死。

「やれやれ、これで片付いた」

弾正は不敵な笑いを浮かべて、多聞閣で勝利の宴を張った。

主君長慶が没すると、最早弾正に並ぶ者無く、彼は主家を凌駕する実力を振るった。そして三好義継を傀儡として、三好家を専断するに至った。

だが、これで満足する弾正ではなかった。

——主家三好など、今となっては物の数ではない。わしの抱く野望は、いつの日か天下をこのわしの力で治めることだ。將軍家がこの体たらく、わしがひ弱な公方に成り代わって幕政を見る。力ぞ、力のある者が天下を治める。そして、天下を統べる者の居城は他を圧倒する、強大で、勇壮で、優美な城郭でなくてはならぬ。

「急げや、我が大望を示す具現の城。究極の美城、多聞城を早う仕上げよ」

野心益々膨張する弾正に伍して、扶桑第一を誇るであろう多聞城は、着々とその荘嚴な形を成してきた。

弾正の悲願、四層の楼閣。切支丹の天主堂ならぬ、天を守る楼閣、名付けて多聞閣がとうとう完全な姿を現した。

弾正によって、新しく考案された高蘭や華頭窓、そして何よりも見る者の目を奪ったのは、屋根瓦の飾りとして、大きくどっしりと据えた、勇壮な架空の魚、鯨であった。

これら斬新な着想は、皆全て弾正のものである。

千四郎は興奮の毎日であった。

——主家長慶様のお家に乗っ取ったも同然のお館様。外敵には天魔の如く襲い掛かり、内なる領国にては領民の敬慕を受くるお館様。こんなにも新しき発想にて、築城を成すお館様。この世に、このよ
うな人がおられるとは。このお方は本当に人なのか、或いは魔性の
権化か。人か魔か。

永禄八年、世に名高き永禄の変が起きた。

松永弾正の、その野望に便乗した三好家重臣たちがいた。

山城の国を三分する、飯岡城主三好日向守長逸と、木津城主三好
下野守政康、それに勝龍寺城主岩成主税助友通、世に言う三好三人
衆である。

この三好三人衆が弾正に加担した。

弾正の軍勢に加わり、京の二条御所にて不遇を託っていた將軍足
利義輝を急襲した。

義輝は劍客公方として世に知られていた。

劍聖、上泉伊勢守信綱に、高貴の身ながら一国一人の印可を受け

た剣の名手であった。

義輝はさらに剣技を研鑽しようと、同じく剣聖と言われた塚原卜伝にも師事し、奥義を伝授された孤高の剣豪であった。

「推参なり、奸物ども」

將軍義輝は、何振りも畳に剣を刺し、刃が使えなくなると次から次に取替え、敵兵を切り伏せて応戦したという。

しかして、衆寡敵せず、最後は我が首をかき切って自害して果てた。

時待たずして弾正は、三好三人衆と共謀し、出家していた義輝の実弟、興福寺一乗院門跡、覚慶（後の義昭）を幽閉した。

邪魔者を全て排除せんとする弾正であったが、由緒ある興福寺の門跡を殺害することを畏れた三好三人衆の反対で、幽閉することになった。

だが弾正は、同時にもう一人の弟、鹿苑院院主、周嵩を襲い、これは殺害した。

この後弾正は、阿波にいる足利義維の子、義栄を京に呼び寄せた。

義輝の従兄弟に当たるこの凡庸な義栄を奉じて、第十四代將軍に遮二無二力づくで就任させたのであった。

全てうまく計らったように見えた弾正だが、ただ一つ手抜かりがあった。

幽閉していた覚慶が、近臣細川藤孝などの決死の救出で、越前国主、朝倉義景を頼って落ち延びていったのである。

この覚慶は後々、弾正の野望が潰えるきっかけとなる男であった。

この後、信貴山城に凱旋した弾正は、ようやく完成に漕ぎ着けた新しき城、多聞城に、用意万端整えて、めでたく入城したのであった。

祝賀の宴が連日開かれ、主だった家臣には馬と新しき住居を与え、城近くに集まった領民にも酒を振舞い、衣食類を与え、益々臣民の尊敬を取り付けた。

穴太衆も宴席に呼ばれ、上機嫌の弾正自ら石工頭石切伝衛門と千四郎たちに労いの言葉をかけ、穴太衆たちに恩賞を与えた。

弾正から直々に労われても、千四郎は大喜びできずにいた。本来なら天にも昇る喜びのはずであったが、何か心の底に不安が生まれていたのである。

——公方様を弑逆して、門跡様、院主様にも害をなす、このお方のこの機嫌の良いこと。

新しい公方様を擁して天下を統べる、このお方に何か仏罰が下りないであろうか。いつか何か起こるのではないか。その時、我々穴太衆が精魂込めたこのお城は無事なのであるか。

何か不吉なものが心の中で生まれ、次第に膨らんでくるような、そんな不安に駆られていた。

松永弾正は、多聞城の新しき茶室開きに、堺より今井宗久、津田宗及、千宗易を招いた。

煌びやかな装飾に彩られた大書院の間で、新将軍の後見人となり、幕政の実権を握った弾正に、堺会合衆の三人の茶匠は、それぞれに祝賀の言上を述べた。

上機嫌で応じる弾正に、宗久が静々と、

「此度の新しきお城の、茶室開きのお祝いとして、我ら会合衆よりお館様に贈品これあり。謹んで献上仕ります」

「わしに祝いの品、何あろう」

弾正が相好を崩し尋ねた。

宗久に代わって宗易が、

「これにござります」

と、持参して前に置いていた品の包みを解いて、すつと前に差し出した。

戦国の梟雄、いや奸雄とも言うべき松永弾正には、不思議な才覚があった。

築城に於ける独創的な発想、茶道具などの鑑賞眼、これらは天賦のものであった。

その姿形を一目見て、弾正はこれが何であるか理解した。

「宗易」

弾正は声を上げ、宗易の言上を待った。

「最早、お見立ての通り、天下の名品、古天明、平蜘蛛の茶釜にござります」

「これを我に贈ると申すか」

「はい、天下広しといえども、これに勝る茶釜は無きかと存じます。

堺の民、全ての心魂を込め、お館様に献上仕ります」

「おお、おお、いかにもこれに勝る物はないぞ。ありがたい、ありがたいぞや。一同、この霜台、心より礼を申すぞ」

「今や天下を統べるお館様。この天下の名器も、お館様のお側にあつてこそ、より一層の光を放つものとなりましょう」

「おお、ありがたい、ありがたいぞや」

弾正はもう一度、歓喜の言葉を繰り返した。

「こなたたちは、わしの賓客である。今宵は新しき城の多聞閣にて、月見の宴を張ろうぞ。明日はこの平蜘蛛茶釜にて、茶室開きの茶会を催すぞ」

弾正の歓喜の声が大書院に響いた。

その頃、前の居城、信貴山城にて小さな事件が起こった。

愛妾お妖の方は、お館様からの多聞城への入城許可が未だ下りず苛立っていた。

「お館様のお召しはまだか。早うお城が見たいぞや」

早くお館様のお側に侍りたいと苛々が募り、

「もう待てぬ。私はお城に参るぞや」

弾正の許しのないまま、無理やり共揃いをして多聞城に押し掛けようとした。心ある重臣はそれを止めたが、お妖の方は頑としてこれを聞き入れず、多聞城に向かった。

途中、行列の前へ百姓の子供がいきなり走り出て、横切ってしまった。駕籠からそれを見ていたお妖の方は、

「待ちやれ」

と叫びその子供を捕えさせ、父親を前に呼び出し、供の者に命じてその百姓をきつく折檻した。打擲が過ぎたのか、打ち所が悪くその百姓は息絶えてしまった。事態を重くみた供の者が、今日のところはお城に戻りましょうと進言、お妖の方も渋々信貴山城に引き上げた。

このことが、重臣の口から弾正の耳に入った。

「驕慢なり、お妖」

弾正は信貴山城のお妖のもとに、暫く謹慎せよと厳しい言命を下した。

勝気なお妖の方は、たかが百姓風情のことと弾正に対して不満を口にした。もしやお館様はこの私を飽いたのではと邪推し始め、またしても苛々が募っていった。この上はお館様直にお目通りをし、本心を伺わんと、化粧も厚く、香も施し、装いも凝らして信貴山城を後にした。

家臣の制止を振り切って多聞城に現れた妖妾を見て、弾正は、

「や、汝謹慎の身なるぞ」

と激怒し、いろいろ言い繕うお妖の方にも耳を貸さず、

「汝の如き性根の汚れた女性にょしよは、この清らかなる城に二度と足を踏み入れることならず」

と言いつつ放った。

それでも言うことを聞かぬお妖の方に業を煮やした弾正は、

「最早これまで、汝、落飾して尼寺に入り、己の所業をとくと省みるがよい」

とうとうお妖の方を追放してしまった。

この顛末がいつか領民に伝わり、弾正の領主としての評判は益々高まるのであった。

永禄九年、松永弾正の権力が強大になるにつれ、共謀者として幕政を支えてきた三好三人衆がここに来て弾正に反旗を翻した。

弾正の宿敵であった筒井順慶もこれに呼応し、大和にて挙兵。これを受けて松永弾正勢は、三好三人衆と筒井順慶の連合軍と、上芝の合戦で対決した。

激戦の末、弾正勢は破れ、この戦で実弟松永長頼を失ってしまった。だが劣勢のように見えた弾正の覇気は衰えず、秘策を練っていた。

陣を一時退いた松永弾正軍を三好勢は追撃せず、小競り合いをしながら東大寺に陣を敷いた。世に名高き名刹ゆえ、よもや攻めてはこまいと甘く考えた三好三人衆に油断があった。

神仏何畏れるものぞ、弾正は全軍を率いて夜襲をかけ、事もあるうに東大寺の大仏殿に火を放ったのであった。

このまさかの急襲と大仏殿の焼き討ちに、三好勢はすっかり怯んでしまった。とうとう逃げ散り、その後三好三人衆は山城から阿波に逃亡してしまった。

戦が終わりに、焼け落ちた大仏殿には、首が落ちた大仏だけが痛々しく残っていた。

まだ後始末として城に留まっていた千四郎は、凱旋して帰城してきた兵士たちから東大寺の焼き討ちの話を聞いて驚愕した。

——何と恐ろしいことか。民衆のあがめる大仏殿を焼き尽くすとは、お館様は神に縋ることはないのか、仏罰を畏れぬのか。いや、これは何か起きる、そうだ、きっと何か起きるに違いない。

千四郎はこの不吉な予感に確信を持つようになった。

千四郎の予感は当たった。

この時期、絶頂期を迎えていた松永弾正の権勢に、やがて少しずつ翳りが見え始めた。

彗星のように現れた尾張の風雲児、織田信長の台頭であった。

この戦国の世に、尾張那古野城に生まれ出でた信長は、近親に疎まれ、家臣に裏切られ、修羅場の中を走り抜け、その逆境の中、天賦の才でめきめき頭角を現した。さらに美濃国主、梶雄と謳われた斉藤道三の息女、帰蝶を正室に迎え、蝮の道三の後ろ盾を取り付けた。

那古野城から清洲城に居城を移した後、海道一の弓取りと言われた駿河国主今川義元に、桶狭間にて逆落としの奇襲をかけ大勝利、見事義元的首級を挙げた。

舅である斉藤道三が、嫡子の義龍に裏切られ、長良川で討ち死にすると、弔い合戦の大義名分を得た信長は、美濃一國を譲るという道三の死の直前の遺言状を掲げ、義龍の籠る稲葉山城に進撃した。しかし道三の鍛えし美濃兵は手強く、要塞堅固な稲葉山城はとても落ちなかった。しかしその中、義龍が三十五歳の若さで急死、幼い龍興が跡を継いだ。

信長は三河岡崎城主松平元康改め徳川家康と同盟を結び、ここに

強力な織徳同盟が結実した。

力を得た信長は斉藤龍興を攻め滅ぼす為に、清洲城から小牧山城に移り、難攻不落を誇る稲葉山城の横腹に、刃を突き付けるように出城を築いた。家臣の木下藤吉郎に、数夜にして出城の墨俣城を築かせたのである。こうしてじりじりと龍興を追い詰めていった。

道三が死して十一年後、ようやく斉藤龍興を滅ぼし、小牧山城を出て稲葉山城に入城、これより岐阜城と改称した。これは中国、周の文王が岐山で挙兵し天下を治めた故事に倣ったもので、信長の天下取りの宣言でもあった。事実これより信長は「天下布武」の大義を世に掲げたのである。

またこの時期よりこれまでの慣習、花押から、手間のかからぬ刻印を使用。合理的かつ実用的な信長らしい発想であった。

永禄十一年、越前朝倉義景のもとに身を寄せていた足利義秋改め義昭が、近臣細川藤孝と信長を頼り岐阜城にやってきた。信長はこれを歓迎、兵力を蓄え、新兵器鉄砲を揃え、足利義昭を擁して総勢六万の大群を率いて上洛、京に滞陣した。

信長の宿舎は東山の東福寺、義昭の宿舎は清水寺となり、これを仮御所とした。そしてたちまち京一円を支配してしまったのである。

信長の上洛をいち早く察知した現將軍義栄は、慌てて京を後に阿波に逃げ去った。その数年後、病死が伝えられた。松永弾正に操られた一生であった。

京の都は、この新しい統治者に恐れと期待を抱いていた。京の民の感情をよく知る信長は、兵士全てに秩序を保つことを強制、規律を乱す者は容赦なく断罪した。

朝廷は織田信長の上奏を受け、足利義昭を第十五代征夷大將軍に叙任、宣下した。信長は直ちに畿内一円の大名に、義昭に恭順の意を示すように号令を発した。

すぐに多聞城にも上意の伝令が来た。これに逆らえば、織田信長軍六万の兵が多聞城に攻撃を仕掛けるとの報せを受けて、松永弾正は逡巡した。

弾正はこれまでに、甲斐武田信玄や安芸毛利元就らと密約を取り交わしていた。

急激に力を付けた信長が東方より上洛し、京に長く滞陣した時、先ず武田信玄が挙兵し、京を目指す。これに呼応して弾正と同盟を結んだ西方の毛利軍が甲斐勢に加担するという、秘密の軍事同盟であった。

だがあまりにも信長の動きが早すぎた。

この時まだ信玄は、信濃の覇権を巡り越後春日山城主上杉謙信と争っていたし、相模小田原城主北条氏康をも警戒し、すぐには進軍できない事情があった。

いかに剛毅闊達な弾正でも、信玄の協力が当てにならぬ今では、単独にて織田信長軍六万の兵と戦火を交え勝利を得ることは不可能であった。

そんな時、堺より千宗易が多聞城を訪れた。

信長が和泉の国、堺に二万貫の矢銭を掛けてきたのである。堺の代官でもある弾正に急を知らせ、指示を仰ごうとしたのである。

「お館様、此度の織田信長というお方、世間では尾張の成り上がりとか、田舎大名とか言う者もおりますが、この宗易にはそうは見えませぬ」

「うむ、宗易よ、その通り、ただの出来星大名に六万の大軍は捌ききれぬ」

「將軍様にお手向かいなされますか」

「ううむ、義昭か、あの男の兄弟はわしが弑した」

「ではやはり戦になりましたようや」

「さにあらず。信長が人を介して、このわしが恭順の意を表し、人質を差し出せば、大和一国は安堵すると申してきておる、

「お世継ぎである久通様を、人質に差し出しまするか」

「久通だけではない、下にいるまだ幼い二人の男子もだ」

弾正は吐き捨てるように言った。

「信長めは、従えば義昭公には口は出させぬと言いおった。あの男、完全にあの公方を下に見ておる」

「お館様、久通様やお二人の若様に、いつ危害が及ぶか分かりませぬ。これは吞める話ではありません」

「さ、そこで其の方の知恵を借りたい。わしは此度は、事を構えず、恭順の意を表す。いや、これは仮のことである。本心から服従するにあらず」

宗易は黙って続きを待った。

「倅共の代償に何か大事な物を差し出すつもりじゃ。知恵とはこの事」

暫く考えて、宗易が口を開いた。

「聞くところによると、織田信長という大名は、生まれながらに戦に明け暮れる日々を過ごし、来たとの事。茶の湯などの風雅なこと

は無縁、即ち茶道に暗い男と思われず」

「お、九十九髪茄子茶入れか」

弾正がぎよつとした。

「いや、違います。他の名器を数点差し出すと申され、その名称は言っではいけません」

「それで通るであろうか」

「これは賭けでございます。これで通れば重畳、もし仮に、九十九髪茄子を指定されたとしても、お館様にとって掛け替えのない久通様、若様には代えられません。お館様が精魂込めて造り上げた、この美しき多聞城が灰燼に帰すことがあつてはなりません」

「よくぞ申してくれた。其の方の言葉通りにしようぞ」

「ご決意の程、お察し申し上げます」

と宗易が深々と頭を下げた。

こののち、二人の話し合いで、信長が堺に課した矢銭についても、此度は応じることに決まった。

ここは織田信長の宿舎、東福寺。

書院の間にて信長の前に、目通りを許された今井宗久が平伏して

いた。

宗久が初の目通りの感謝の辞を述べた後、自分が所有する名物、松島の茶壺と紹鷗茄子の茶器を信長の前に差し出した。

いずれも天下に知られた名物で、茶人垂涎の一品である。

「謹んで献上仕ります」

宗久は頭を下げた。

堺の会合衆の長老格である宗久は、独自の考えを持っていた。

これからは、この新しき統治者、織田信長の時代が来るやも知れぬ。と判断し、松永弾正の方は千宗易に任せ、本人は早くも信長に急接近したのである。

これも商人としての才覚であった。しかしながら、宗久はあくまでも堺衆であり、堺を守ることは忘れず、堺を裏切ることとは決してしない人物であった。

今のところ堺を敵と見做す信長は、宗久が人を介して隠密裏に通じてきたことに暫く熟考した後、これを受け入れたのであった。

信長にも、宗久なる人物の情報がもたらされていた。

今井宗久は、初期会合衆の第一人者であった茶人武野紹鷗の弟子であり、娘婿でもあった。紹鷗死後、全財産を貰い受け、茶人とし

ても豪商としても名を馳せていた。

そして大事なことは、宗久は倉庫業を営み、火薬製造業、鉄砲製作業、海外貿易商などで、堺の豪商として最高実力者になっているという事実だった。信長はこの新しい武器、鉄砲買い付けの為、宗久の接近に応じたのであった。

「今井宗久であるか。このような天下の名物を受け取っても、戦に明け暮れ、風雅を楽しむ余裕の無いこのわしには、宝の持ち腐れ、何より眼が利かぬ。だが其の方、天下に知られた茶匠である。これよりは、わしも連歌に親しみ、茶を嗜む時が多かろう。其の方にわしの茶の指導を申し付ける」

「は、今井宗久、これよりお館様の為に、身を粉にしてお役に立ちとうござります」

「よし、それでは、堺に課した矢銭、逆らえば直ちに軍勢差し向けるが如何に」

「恐れ入りました。この宗久、身に代えて堺衆を説得いたします。少しばかり、お待ち下さりますようお願いいたします」

「宗久、良く聞け、二万貫の金は、この信長の賄いにするのにあらず。帝のおわす内裏の荒れた館の修復、新しき將軍の為の二条御所

の改装にあてがうものである」

声を受け、宗久は深々と頭を下げた。

「宗久、これより、其の方に別途で鉄砲二千挺の買い付けを申し付ける。これは、わしと其の方との商談である」

「はは、これはありがたきお言葉、重ねて御礼申し上げます」

「さて、其の方に、ちと尋ねる。松永弾正が所持している、九十九髪茄子なる茶入れがあると聞く」

「ほう、九十九髪茄子の茶入れにござりますか」

「いかなる名物か、聞かせてくれい」

「はい、足利三代将軍、義満公ご愛用の茶入れにて、我らの茶祖、村田珠光が賜りし後は、転々と人に渡り、松永弾正様がご入手なされたと伺っております」

宗久は、堺の会合衆が、弾正に献上したことを伏せていた。

「いかほどの値打ちの物か」

「国一つの価値、或いは国一つでも買えぬと言われております」

「ううむ、国一つでも買えぬ名物であるか」

信長は押し黙ってしまった。

松永弾正の居城、多聞城に伝令が届いた。

恭順の意を表す為に、九十九髪茄子の茶入れを持参し、京の東福寺の陣所に参るべし。

千宗易の、苦肉の策も通じなかつたのである。

後継ぎの久通と幼い二人の男子は、人質に出さずに済み、多聞城も無事、領国も安堵。

「やんぬるかな」

弾正は渋々承服した。

京都東山、東福寺にて信長に拝謁した弾正は、落ち着いた、さばさばした表情で対面した。ここで恭順の意を表し、信長に臣従することを誓った。

ここに、戦国の覇者、両雄が新旧入れ替わったのであった。

急遽、堺に戻った今井宗久は、期せずして同じ頃堺に帰ってきた千宗易と会い、意見交換をしていた。

「宗易さん、弾正様は信長様の軍門に下りました。これからは信長様が益々力をつけ、天下を統べるかも知れません。ここは矢銭に素直に応じて信長様に近づいた方が、堺の為、生き残れる方法と考え

ます」

「はい、おっしゃる通りです。我ら堺衆は、誰の家来でもなく商人です。利に聡く、力の強い方に付く事が我らの生きる道、これは正しい商道であると思っております」

「よく言ってくれました宗易さん。では明日の会合衆の集会では、これからは弾正様を見限り、信長様に付く、このことを根気よく説得せねばなりませんね」

「私も全力を尽くします。弾正様の武運はこれまでだったのです」
この二人はあくまでも堺衆であり、堺を守ること、堺が栄えること、このことのみにも人生を賭けていたのである。

時変わって、入京し、征夷大將軍に就任した足利義昭は、毎日嬉しさのあまり、はしゃぎまくっていた。

最初は織田信長宛の手紙で、武勇天下第一などと褒めちぎり、御父織田信長殿”とまで持ち上げていたが、だんだん自惚れが強くなって、己の力で將軍になったと過信するようになっていた。

松永弾正の臣従を受け入れた信長に対して、

「断固、松永弾正の首を刎ねよ。弾正は余の兄弟を殺したただけでな

く、余を他国に追いやった張本人である。断じて許さず」

怒り収まらぬ義昭に信長は、

「上様のお怒りの心、この信長、痛いほど分かります。されど、上様の御為おんに掲げし天下布武は未だ遠し。大義の為、松永弾正の力はこれから役立ちましょう。何卒、この信長に免じて、ここはご辛抱下さりませ。大願成就の暁には、必ずや弾正を始末いたします」

「ならぬ信長、余はあやつ許せぬ」

根気よく説得していた信長は、ここで人が変わったように険しい顔付きになり、語気を荒げた。

「天下布武の大義の為、兵力の備えはこの信長が取り仕切ります。上様には口出しご無用とお心得あれ」

突然信長が発した無礼なる言葉に、義昭は目を丸くして驚いた。將軍義昭と信長の間を生じた亀裂の始まりであった。

東福寺の宿舎で、信長は一人考えた。

——松永弾正という人物、誠に奸計を巡らす油断のならぬ男。残虐の限りを尽くして敵をねじ伏せる武将であるが、反面、茶道や連歌に長じた風流人でもある。我と比べて、似て非なるも重なる所あり。

信長は、何より弾正の、戦国の覇者としての実力を認めていた。

——あの男、いつまで臣従するかは分からねど、今はあやつのを借りたい、いや借りねばならぬ。それにしても、あの義昭の驕りよう。今ある地位は誰のお陰ぞ、いつか懲らしめねばなるまい。

永禄十三年、装いも新たに二条御所が完成した。落成祝賀会には弾正も呼ばれた。

信長は將軍義昭と弾正が顔を合わさぬように気配りをしていた。

折しも、三河岡崎城主徳川家康も参賀の為、上洛していた。信長は盟友家康に、上機嫌で弾正を紹介した。

「三河殿、これにおわす御仁は、名高き松永弾正殿である。嘗てこの京の都を支配されたお人である」

ここまででは良かった。

「この御仁はの、我らにできぬことを三つ成し遂げた。一つ、公方様を弑逆し、二つ、主家三好を滅ぼし、三つ、奈良東大寺の大仏殿を焼いた」

この言葉に弾正は顔中、火の出るほど赤らめ、齒を食い縛ってこらえた。

一人になった時、弾正は怒りを爆発させ、

「うぬ、信長許せん。臣下の礼をとったとはいえ、このわしは官位、従四位下、弾正少弼であり大和の国主であるぞ。公の面前でのあの無礼な言葉、このような辱しめは初めてじゃ。今に見ておれ」

弾正の信長への憎悪は決定的なものになった。

しかし、この事は誤解であった。

信長は自身の言葉で、弾正を褒め上げ、こんなすごい人物も臣従したぞと家康に伝えたかったのである。

京の宿舎に戻ってから、弾正は怒りが収まらない日々が続いていた。

そんな折、弾正を訪ねて、ある人物が宿舎にやってきた。

客間に座った立派な身なり、落ち着いた居住いの人物をじっと見つめて、弾正は声を上げた。

「や、これは」

後は確かめるように、もう一度見つめた。

「お館様にはご健勝におわすこと、祝着至極に存じます。それがしは明智十兵衛、只今は織田家臣、明智日向守光秀にござります。それがしの事、お忘れやも知れませぬが、過ぐる年、堺の鉄砲鍛冶射

的場にて、初めてお目通り致しました」

「あいや、憶えておる。これはこれは」

やがて気がついて、言葉遣いを改め、

「明智日向守光秀殿、お久し振りにござる。これは驚きました。いや、ようこそ参られました」

「お館様には、是非とも機会をみてお目に掛かりたく」

「待たれよ、明智殿、松永弾正とお呼び下され。貴殿も知っての通り、この身もいまや織田信長公の臣下でござる」

「それでは、面映うござりまするが、これより作法通りにてお話しします」

「おお、そうして下さい、いやお久しゅうござった」

「弾正殿とお別れして以来、この身も移り変わり激しく、縁あつて信長公に随臣し、上洛致しました」

「道三殿亡き後、如何に過ごされたか、差し障りなくばお聞きしたい。本日は共にゆるりと語りましょうぞ。よう参られた、嬉しゅう
うきうき」

長きこと会わずにいた知己の如く、弾正は明智光秀を歓迎した。

別間にて酒宴になり、二人は楽しげに語り、時を忘れた。

「あの折、堺にてお預かりし小太刀、国許美濃に持ち帰り、主人、道三様に間違いなくお渡し致しました。その時、道三様はすぐに思いう出され、あの時の、あの武士が今の松永弾正殿かと、涙を浮かべて喜んでおられ、生きておったか、あいや、生きておられたかと膝を打ちながら喜んでおられました」

「明智殿、この私の願い叶えて下さり、衷心より御礼申し上げる」
「お尋ね致します。あの時、何ゆえ私に脇差をお預けになられましたか。本来なら使者を以って美濃に遣わせれば済むことを」

「それはの、いつか美濃に届けようと思っていたところ、貴殿が今井宗久宅に滞在されているのを知り、それがしも堺に赴く事になり急に思いついたこと、言わば時の戯れとでも申そうか」

「時の戯れ」

光秀は首を傾げた。

「我も道三殿も、若き頃の血と泥に塗れた生きざまを語るのは辛きこと、使者を立てる程のものではなかったのです」

「道三様は、弾正殿と同じように、これ以上若き頃の話は致しませんでした」

「その通り、お互い戯れた生きざまであった。道三殿も他界され、

この私も年老いた。いずれあの世で再会し、若き頃二人で語り合おうた夢の続きをすするでありましょう」

光秀もにつこり頷き、この後二人は、夜が更けるのも忘れて、楽しそうに語らうのであった。

元号が変わり元亀元年。

越前国主朝倉義景が織田信長に反旗を掲げ、信長はこれを討つべく京を発し、義景の居館、一乗谷を目指した。

信長の妹お市の方、その夫、浅井長政がこれに加勢するはずであった。だが古くからの同盟関係にある朝倉義景との敵対はできぬと、信長を裏切つて挙兵した。前方に朝倉軍、後方に浅井軍と挟撃され、信長軍は撤退を余儀なくされるに至った。信長はこの討伐軍に参陣していた弾正に、退路に立ちほだかる近江朽木谷領主朽木元綱を味方になるように説得せよと下命した。

弾正は退路を絶たれては我が身も危ういことから、下命に従い必死に朽木元綱を説いて、ようやく軍を退かせた。信長の逃走で世に言う「金ヶ崎の退き口」の、目立たぬが陰の功労者であった。

命拾いした信長は後になって、

「霜台殿、此度の功績、この信長恩賞をもって応えたい。望みあらば申されよ」

と弾正に語ると、

「されば、一度献上仕りし九十九髪茄子茶入れ、今一度この老骨に御下賜くだされば、末代までの誉にござります」

と厚かましく申し出た。

「それはならぬ。それに見合った功ではない」

信長は言下に退け、不快を露わにした。弾正は諦めるしかなかった。

浅井、朝倉連合軍から窮地を脱した信長は、居城岐阜城に戻り、こここのところ不穏な動きを見せる足利義昭のことを考えた。将軍の権威を保とうとする義昭が、全てを取り仕切る信長に反発し、己の力を過信し、執政を専断しに掛かっているように見えた。

信長は京の義昭に痛烈なる五ヶ条の掟書を送りつけ、義昭を諫めた。これを見た義昭は、

「おのれ信長、余は將軍なるぞ」

と激怒し、益々信長への怒りを増し、

「余の力、見せてくれん」

と、いろいろと画策をし始めた。

義昭も少しは落ち着いたかと思っていた信長だったが、入ってくる情報では義昭が各大名に親書を送り、何やら裏で暗躍している気配。業を煮やした信長は再び將軍義昭に対し、失政を論あいつらいって諫める異見十七ヶ条の条書を送りつけた。これを受けて義昭も怒り心頭に発し、將軍義昭と信長の亀裂は決定的なものになってしまった。

元龜九年、石山本願寺光佐頭如が信長に反旗を掲げ、近隣の大名に反信長連合を呼び掛けた。言うところの石山合戦の始まりであった。

伊勢長島の一向宗が尾張小木江城を攻め、信長の弟信興を殺害、これをきっかけに信長は朝倉、浅井、一向宗などの反信長大包囲網を敷かれ、最大の危機を迎えていた。

そんな折、石山本願寺攻めに参陣中の弾正に密書がもたらされた。意外や、足利義昭直筆の密書であった。内容は、これまでのことは全て許すと、先ず書かれていた。続いて、甲斐の国主武田信玄が兵を挙げて上洛してくる、よって石山本願寺と密かに和し、兵を退いて信玄に加担し、信長を討つべしと書かれていた。

「公方の裏切りとは片腹痛し」

と、弾正は失笑したが、しかし最強を誇る武田の騎馬軍団が押し出せば、いかに信長とて太刀打ちできるであろうか。

「よし、好機到来なり。憎き信長、目にももの見せてくれよう」

久し振りに、身体中に闘志が湧き出るのを感じた。

朝従夕背の弾正らしい決断であった。

石山本願寺光佐頭如に密使を立て、密かに和を結び、周到に退陣の仕度をした弾正は、すぐに甲斐武田信玄に使者を出した。信玄上洛の意思を確認したのである。信玄からは、自分の領国の他に、信濃、上野、駿河の兵力を集め、相模北条の援兵も得て、打倒信長の為に甲府を発したとの伝令が届いた。

全て義昭の密書の通りに事は動いていたのである。

「あの公方、はかりごと謀ができる男とは」

弾正は、ここに至って義昭を甘く見ていたことを正さねばならなかった。

弾正のもとに朗報が入った。

信玄率いる甲斐軍団が織田、徳川連合軍と遠江三方ヶ原で激突。

武田軍の圧倒的勝利で、この後、京を目指して進撃中との報せであ

った。

「時こそ来たれ、我も立たん」

すぐ軍を退き、多聞城に戻り、信玄との合流する準備に掛かった。

また義昭から密書が届いた。自分は信長と義絶した。よって一刻も早く信長追討の先陣を切つてのち、信玄と合流すべしとの内容が書かれていた。

「言われるまでもないわ」

弾正は挙兵の時期を狙っていた。

事変が起きた。

信玄が進軍をやめ、暫くして軍を退いたのである。情報が錯綜する中、事実が判明した。信玄が病で倒れ、甲斐に戻り死去したのである。

万事休す。弾正の野望は潰えた。

戦国の英雄、武田信玄の急死は青天の霹靂であった。

「信長め、運の良い奴」

弾正は観念した。

その後の行動は素早かった。すぐ岐阜城に赴き、自らの次男、三男を人質に差し出し、信長に許しを乞うたのである。

岐阜城にあつて、信長はいろいろ考えていた。

——この松永弾正は誠に食えぬ男。だが石山本願寺光佐頭如らにとどめを刺すには、戦に長けたこやつ知恵と力が必要。ここは一旦許すとするか。

織田信長という武将は誠に短気ではあるが、戦に於いては、他国の大名たちには及びもつかぬ程辛抱強く、根気よく、実の熟すを待つ我慢の武将だった。

「霜台殿、今度だけはこの信長折れようぞ。二人の子、受け取った」

信長は、声高く言つて弾正を許したのであつた。

信長はこの事とは別に、義絶した將軍義昭の始末を考えていた。

一連の反信長連合軍の後背には、常に義昭の策動があつたことは明白である。

「あの葱公方許せん」

信長は家臣などに、よく渾名を付けて呼ぶ癖があつた。近頃では將軍義昭を葱公方と呼んで罵っていた。

信長はついに指令を發した。

京都二条御所を信長軍が包圍し、將軍義昭を追放したのである。

この後、義昭は山城槇島城に籠つて反撃するが、それも落とされ

若江城に監禁された。その後、備後鞆の浦に流されたのである。

ここに、十五代続いた室町幕府は滅亡したのであった。

暫く、多聞城にて大人しく謹慎していた弾正に、信長より石山本願寺攻めに参陣せよとの指令が届いた。

弾正は渋々命に従い、大坂天王寺砦に陣を敷いた。そんな矢先、敵である石山本願寺頭如より密書が届いた。

越前上杉謙信が、打倒信長の為挙兵し、京を目指して来る。それに呼応して安芸毛利氏も挙兵して京に向かう。ここは再び和を結んで兵を退き、上杉軍と合流して欲しいという内容であった。

弾正はすぐに情報を集めた。間違いなく謙信が来る。義の為にしか戦火は交えず、というあの戦国の英傑、上杉謙信が信長討伐の狼煙を上げた。

弾正の身体が火のように熱く火照った。信長への憎悪が、再びこの弾正を謀反へと走らせた。

この後、何が起きても悔やむ事なし。腹を決めた弾正は、石山本願寺頭如と再び和睦し、兵を引き揚げた。

不運がまた起こった。

上杉謙信の死であった。

軍勢を率いて越後春日山城を発した直後に倒れ、急死してしまったのである。あろう事か。弾正を再び襲った身の不運。

「何たることか、謙信まで逝くとは、信長め、何という強運ぞ」

進退ここに尽きた弾正は、

「我が武運尽き果てた。最早これまで」

と覚悟を決め、多聞城に籠った。

心気を静める為、茶を点てた弾正の脳裏に、ふっと穴太衆の石工、千四郎の顔が浮かんだ。

一生懸命、全身全霊を込め石垣を築き、百年先にも残る石垣を築きますと、汗まみれで語った千四郎の姿が浮かび上がった。

——そうよな、間もなく信長がこの城を落とすであろう。聞くところによれば、信長はこの多聞城を羨んでいたそうよ。わしが死しても城は残る。後に信長であろうが、誰が住もうがこの城を築いたのはわしである。この城がある限り、末代までわしの名は残る。ここで決戦となれば、城は焼失するかも知れぬ。案ずるな千四郎、城は残すぞや。我が死に場所は信貴山城。

信長は、なぜこうまでも弾正が反逆するのか不思議に思っていた。

大和一国は信長の勢力内にある。反信長の援兵が弾正のもとに来るのは、とても無理と誰でも分かることであつた。

信長は弾正に対して、これまで畏敬の念を抱いていた。

弾正には、邪魔者は必ず消すという、残忍ともいえる精神の強さがあり、それこそ戦国の覇者になれる資質なのであつた。

——老いが機を見る目を鈍らせたか、所詮これまでの男であつたか。

折しも側に明智光秀が控えていた。

「恐れながら言上仕ります」

「うむ」

信長は短く答えた。

「多聞城を棄て、信貴山城にて決戦の覚悟の弾正にござりますれば、多聞城は後世まで残したき心情かと愚考仕ります」

「ふん、それがどうした」

「弾正は、平蜘蛛の茶釜なる名器を所持しております。これも後世まで残そうと思つているのではありますまいか。死は免れぬとしても、天下の大名物を道連れにしては武門の恥と心得ます」

「うむ、それで」

「信貴山城攻撃の前に、何卒この光秀をか城にお遣わし下さりませ。お館様のご不審が解け、また名器を差し出すことあるやも知れませぬ」

「うむ、一度其の方あやつに会ってみるか」

「は、攻めるに急がず。攻め時はこちらにござります」

光秀は静かに頭を下げた。

信貴山城に籠った弾正に対し、信長から特使として明智日向守光秀が遣わされた。

応対に出た弾正に、光秀は、

「このような事態になり、誠に無念にござります」

「明智殿、老骨の片意地とご理解下されよ」

「弾正殿、事ここに至っては大和一国の安堵は難しゅうござる。が、実は主君信長公、近頃茶の道に精進著しく、天下の名物など茶道具を御自らの眼にて蒐集せられております」

「ほう、それは重畳」

弾正は素っ気なく答えた。

「されば弾正殿所有の、世に名高き平蜘蛛の茶釜、これを差し出さ

れては如何に。その後城を明け渡し、隠居なされますれば、弾正殿とお二人のお子も助命されると考えます。何卒、この光秀にお任せ願いたい。それがし身命に懸けて助命嘆願努めまする」

弾正は深く息を吐いて、

「明智殿、ご温情溢るる言葉に、この霜台、身に浸みて言葉もござらん。この通りでござる。感謝致しますぞ。されど、それがしも斉藤道三殿の最期と同じ心境でござる。戦場に散るは武門の誉れ、差し出したる二人の息子も、武門に生まれし者の運命さだめにござる。拙うはござるがこの霜台、信長殿に敵わぬまでも螳螂の斧を振りましようぞ」

「お見事なるお覚悟、この光秀、武士の魂を教えられました」

「明智殿との数奇ながらのご厚誼、深く感謝致します。あの世にて道三殿にお話ししましたようぞ。最後に信長公にお伝えあれ。名物、平蜘蛛の茶釜と霜台の白髪首は、断じてお目見え候わず」

信貴山城より戻った光秀から弾正の覚悟の言葉を聞いて、信長は、「是非に及ばず」

と一言だけ発した。

この後、弾正のような謀反人がいつまた出てくるかも知れぬ戦国

の世、信長は後々の見せしめとして、弾正が人質として差し出して
いる二人の男子を、京の三条河原で処刑した。

続いて信長は弾正討伐の総大将を嫡男信忠に命じ、付ける武將に
明智光秀、筒井順慶、細川忠興などを任命した。

「先ず多聞城を攻めよ。きやつらが開城を示しても攻め入るのだ。
多聞閣なる櫓に火を掛けよ。もうあの城は要らぬ。このわしはあれ
以上の城を築いてみしよう」

そして最後に呟いた。

「弾正がわしの立場であれば、同じ事をするであろう」

僅かの兵士たちが守る多聞城は開城の意思を示したが、信忠の率
いる討伐軍は聞き入れず、一斉に攻め込んでいった。城が落ち、信
忠軍は信長の下命通り多聞城に火を放った。

弾正の権力の象徴だった、天を守る美しい楼閣は、ここに焼失し
たのだった。

天正五年十月。

織田信忠率いる討伐軍に羽柴秀吉、丹羽長秀の武將も加わり、一
斉に信貴山城に攻撃を開始した。

三万の軍勢に対し、弾正の籠城兵は総勢三千。城兵は全力を挙げ
て防戦した。

三の丸が落ち、次に二の丸が崩れ、いよいよ本丸を討伐軍が取り
囲んだ。

弾正は、この信貴山城でも天守閣と名付けた高樓の最上階で、従
容として一人茶を点でていた。天下の名物、平蜘蛛の茶釜であった。

最後の茶を、心静かにゆっくり飲み、覚悟を決めて呷いた。

「千宗易よ、戦場にての茶は、たやすく悟れるが、平時は如何に。

茶の道、究めしこと、あの世にて待つ」

やがて平蜘蛛の茶釜に火薬が込められ、他の箇所にも火薬が仕掛
けられ、一斉に火が点けられた。

耳を劈く轟音と共に、天守が吹っ飛び、焼け崩れ行く紅蓮の炎の
中、弾正の姿は消えていった。

希代の梟雄、松永弾正久秀の壮絶な最期であった。

奇しくもこの日は、十年前に弾正が東大寺大仏殿を焼き払った同
じ日であった。

戦火が消え、焼けて崩れ落ちた多聞城天守閣の跡に、立ち尽くす

一人の男がいた。

穴太衆石工若頭、石切千四郎であった。

——これは仏罰だろうか。お館様は野望が強すぎた。美しかった多聞閣は焦土と化し、石垣だけが残った。

父伝衛門の言葉が、千四郎の胸に甦った。

——もし城が焼け落ちても石垣は残る。残っておればまたそれに乗せて城が造れる。この石の上に、また誰ぞが城を築くことだろう。

父の言う通りになった。

——我らはこれからどうする。お館様には百年の後まで残る石垣と申し上げた。だが百年、いやそれ以上、二百年三百年の後にも残る石垣を築くのだ。お館様、この千四郎、築いてみせます。

錚々と静まり返る夕闇の中に、千四郎の姿は消えていった。